

## 日本口承文藝學會

## 代表訪中団の報告

飯倉照平

昭和五十五年十二月十日から十六日まで、日本口承文芸学会代表訪中団（一行九名）が、中国民間文芸研究会の招きで中華人民共和国を訪問した。日本側は北京と上海で二回の学術報告会を開き、また北京での二回にわたる座談会では、中国側の報告があったほか、今後の交流計画について意見の交換をした。

中国民間文芸研究会は、中国における口承文芸の分野での唯一の全国組織で、中国文学芸術会連合会（略称、文連）に所属する団体として、一九五〇年三月に結成された。機関誌としては、『民間文芸集刊』（不定期刊）を三冊出したあと、一九五五年四月に『民間文学』（当初月刊、一九六二年以後隔月刊）を創刊、一九六六年四月刊の通巻百七号で文化大革命のため停刊したが、一九七九年一月から月刊として復刊した。正式に組織が回復したのは、一九七九年十月の常務理事拡大大会からで、同年十一月に開かれた中国民間文学工作者第二次代表大会で新しい理事会が選出された。この大会における賈芝氏の報告では、五項目の提案の一つとして国際交流の強化があげられていた（『民間文学』一九八〇年一月号）。

このような方針を反映して、『民間文学』一九八〇年五月号には、関敬吾氏の『日本の昔ばなし』（岩波文庫）から三編が訳載された。それに付された張紫農氏の一文では、かつて同書が関氏から李星華氏（『白族民間故事伝説集』の著者で賈芝氏の夫人、一九七九年逝去）に贈られたいきさつが紹介されるとともに、日本口承文芸学会についても言及されていた。日本の事情に不慣れな張紫農氏は、これ以前にも日本口承文芸学会の活動に注目する発言をしている（『社会科学戦線』一九七九年三号、三百三十一ページ）。

こうして、日本口承文芸学会前会長の関敬吾氏及び、中国民間文芸研究会とのあいだで訪中の計画をすすめていた東京都立大学の中国民話の会（代表・村松一弥氏）に、まず年内に数人程度の代表団を招請したいという中国側の意向が伝えられた。これは同研究会による国際交流の第一陣ということになる。中国民話の会では、この分野の全国的な学会である日本口承文芸学会がまずこれを受け入れることが望ましいと判断し、そこで関敬吾氏と白田甚五郎会長に相談をして、代表団の派遣が決まった。関係者のあいだで協議された代表団の構成と日程は、十月二十五日の早稲田大学での研究例会のあとに開かれた理事会で承認された。関敬吾氏の訪中は、酷暑の時期であるため今回は見送らざるをえなかった。

代表団の構成はつぎのとおりで、窓口となって事務局を担当した中国民話の会から三名が加わった。

団長・白田甚五郎、副団長・直江広治、秘書長・加藤千代、内田るり子、伊藤清司、大林太良、飯倉照平、野村純一、通訳・乾尋

一週間という期間は日本側の都合で決めたものであったが、この

窮屈な日程で中国側は最大限の接待をしてくれた。以下、日程にしたがって、その概要をしるすことにしたい。

十二月十日(水)。朝九時成田発の日航便で北京に直行、北京時間十三時(日本時間十四時)ちょっと過ぎに北京空港に着き、賈芝氏以下関係者の出迎えを受けた。宿舎の北京飯店に落ち着いたあと、たそがれの天壇を一時間半ほど見学。夕食後、中国側と打合せがあった。

十二月十一日(木)。朝起きると、北京の街は白一色の雪化粧をしていた。しかし、そのため交通が渋滞し、一時間近くもおくられて中央民族学院に着いた。副院長の張養吾氏から説明を聞いた。中国民間文芸研究会(以下民研会と略す)の副主席で当学院の語言文学系主任兼民族語言研究所所長である馬学良氏のほか、胡振華(回族)、楊權(トン族)、劉保元(ヤオ族)、吳德坤(苗族)、馬駒(回族)、回景芳(回族)、阿帕爾(ウイグル族)、金道權(朝鮮族)、および通訳として朴敬植(朝鮮族)の諸氏が列席したが、時間の制約で個々に話を聞けなかつたのは残念であった。芸術学部の少女たちの舞踊を参観してからマイクロパスに乗ると、二時間が経過していた。中央民族歌舞団には、予定を大幅におくられて昼食の時間に着き、一時間にわたって、「イ族舞曲」(器楽合奏)、「追魚」(タイ族舞踊)、「軍馬は駆けめぐる」(カザフ族の楽器ドンブラの演奏と歌)、「竹楼のわが家は静か」(タイ族のメゾソプラノ独唱)、「高山は青い」(高山族の舞踏)、「軍馬は新疆を駆けめぐる」と「ソーラン節」(蔣大為氏のテノール独唱)、「銅鼓の舞い」(イ族の舞踏)の八つの出し物を見せてもらった。

十一日午後は、故宮を一時間ほど見学したあと、王府井の商店街を散歩したりした。夜十九時から、新僑飯店で民間文芸研究会の主

席である周揚氏による招宴があった。中国側の出席者は、ほかに民研会副主席鍾敬文氏、同常務副主席賈芝氏、同副主席馬学良氏、同秘書長王平凡氏、同副秘書長程遠氏、文連秘書長陸石氏、文連国際部羅斐氏、民研会事務室主任林相泰氏、同事務室王汝蘭氏、同事務室金輝氏、遼寧大学中文系副教授兼民研会理事烏丙安氏の、あわせて十二氏であった。

十二月十二日(金)。朝八時半に北京大学に着いた。窓外に竹林のある、香を焚きしめた臨湖閣で、一時間ほど話を聞いた。外事処所長の倪孟雄氏に概況をうかがったあと、下立強(アジアアフリカ研究所副教授、日本文学)、段宝林・屈育徳(ともに中文系講師、民間文学)らの諸氏と質疑をかわした。ほかに吳熙華・邱培(ともにアジアアフリカ研究所研究生)、田秀玲(外事処職員)の諸氏も列席した。会のと北京大学図書館の展示室を参観した。

つぎに訪れた北京師範大学では、十時半ごろから一時間ほど話を聞き、その後校内を参観した。副校長の任彦氏の説明のあと、中文系の主任で教授の鍾敬文氏が、一九五三年に正式に民間文学教研室が設置されてからの経過を語った。同席した許鈺(中文系副教授)、張紫農(中文系副教授)、烏丙安(遼寧大学)の諸氏は、いずれもその第一期生であるという。ほかに陳子艾(民間文学教研室副主任)、潛明滋(中文系講師)、田小杭・梁木森(ともに民間文学教研室教師)、李德芳(同研究生)の諸氏も列席した。

一九七九年夏には、一カ月にわたる夏期民間文学講習班が北京師範大学で開催され、全国から六十数名が参加した。講師には関連研究機関からの協力があったにしても、この大学が民間文学研究者の育成に実績があったからであろう。この夏期講習での講義をもとにして原稿に手を加え、さらに関連研究機関の検討をへて、鍾敬文主

編『民間文学概論』（一九八〇年七月、上海文芸出版社刊）や『民間文学作品選』（一九八〇年八月、上海文芸出版社刊）などの『高等学校文科教材』が作られている。これらのほか、張紫農氏の『民間文学基本知識』（一九七九年七月、上海文芸出版社刊）のようなものもあり、いずれも学会あてに寄贈していたのだ。

十二日午後の十四時四十分からは、民族文化宮で日本側の学術報告会が開かれた。聴衆は関連研究機関から来た人たちで約百名。まず白田団長が「日本における口承文芸研究の現状と展望について」を語り、ついで内田が「音楽面から見た日本民謡の研究」を語ったのちに一時休憩し、最後に大林が「世界の神話学の動向」を語った。司会と団員紹介は鍾敬文氏が担当された。この種の学術報告会としては、中国社会科学院の劉魁立氏が、一九八〇年三月に十余日におたって「国外民間文学の流派について」の報告をしたという。十二日夜は、映画見物その他で過ごした。

十二月十三日（土）。民族文化宮で「中日民間文学工作者座談会」が開かれた。朝九時から十一時半まで、鍾敬文氏が「三十年來のわが国の民間文学の調査採集工作の歴史、方法および成果について」の報告を行ない、午後は十四時五十分から十七時すぎまで、賈芝氏が「中国における民間文学研究の現状と展望について」の報告を行った（この記録は『民間文学』一九八一年三月号に掲載された）。中国側は、司会の馬学良氏と報告者の両氏のほか、王平凡、程遠、高魯（民研会編輯部）、張文（同編輯部副主任）、吉星（同研究部副主任）、陶陽（同研究部副主任）、楊亮才（中国民間文学出版社副社長）、王一奇（民研会資料室副主任）、林相泰、劉魁立（民研会理事、中国社会科学院文学研究所民間文学組）、任欽（同前）、王克勤（中国少数民族文学研究所科研処）の諸氏が出席した。鍾敬文、賈芝両氏の

報告は、通訳をふくめてではあるが、それぞれ二時間をこえる熱氣のこもったものであった。一九一八年以後の中国での民間文学研究の歴史を身をもって体験してきた鍾敬文氏（一九〇三年生）と、解放後の中国民間文学研究会を守り育ててきた賈芝氏（一九一三年生）とは、同研究会の実質的な中心であるといえよう。

十三日の座談会では、両氏の報告のあと一時休憩してから、司会を直江副団長にかわって、交流計画について意見の交換をすることになった。まず関敬吾氏からも委託のあった、中国昔話のタイプ・インデックスを共同で作成する件について一時間ほど話し合った。中国では、A Tどころかエパーハルトや丁乃蓮のそれも訳出されていないため、すぐに結論を出すにはいたらなかったが、翌日の座談会では、日本側からさらに検討した上で進め方を考えたいということになった。この日は会場が十八時三十分までしか使えなかったため、座談会を翌日続行することを日本側から申し入れた。十三日夜は、鍾敬文氏が夫人の陳秋帆氏（日本文学翻訳者）と令息の鍾少華氏をともなって北京飯店に來訪して懇談し、一部の団員は評劇「成成喋血記」を鑑賞した。

十二月十四日（日）。午前は頤和園を見物し、園内の聴鵬館で昼食をとった。文連国際部の顧佩芳氏が通訳として同行した。

十四日午後、十五時二十分から三時間にわたって新僑飯店で座談会を続行した。司会は直江があたり、中国側からは鍾敬文、賈芝、馬学良、程遠、吉星、劉魁立、林相泰、王汝蘭、それに金輝、李亜沙の諸氏が出席した。最初に白田団長から、中国側で日本の口承文芸研究の論文集を編集するさいには大いに協力したいことを、また日本側でも中国の口承文芸についての論文を紹介したいことを提案した。これに対し、賈芝、鍾敬文の両氏からは、相互理解の必要性に

ついてかなり具体的な話があった。白田団長はさらに、国際交流関係の補助金などを得て中国からの代表団の訪日に努力したいことをのべ、また伊藤清司の留学、中国民話の会の訪中についての協力を要請した。最後に中国側から、民間文学資料館の設置について助言してほしいという要望があった。十四日夜は、北京烤鴨店(全聚德)で日本側の答礼宴会があり、当日の座談会の参加者と烏丙安氏が出席した。

十二月十五日(月)。朝食のあと七時に北京飯店を出発、北京空港を九時少し前に出た国内便で上海に向かった。北京から林相泰、顧佩芳の両氏が同行した。上海では錦江飯店に宿泊した。

十五日午後、上海文連で日本側の学術報告会を開く。聴衆は約八十名。最初に白田団長が、日本での口承文学研究の概況について三十分近く話し、それから直江副団長が「日本民俗学の現状と展望」と題して、一時間ほど報告した。司会は歌謡研究の分野で何冊か著書のある姜彬(筆名天鷹)氏であった。会が十六時に終わったあと、譚正璧氏(文学史家)と錢少柏氏(民俗学者)が挨拶に来られた。そのあと、十六時二十分から約一時間、上海文芸出版社を訪問した。出版社側からは副編集長の鄭煌氏、民間文学編集室の錢舜娟、劉斌、鄭碩人の諸氏、および雑誌『故事会』編輯組の阿承偉氏らが出席して、説明をしてくれた。中国では一九八〇年に民間文学出版社が北京にできたが、まだ多くの本を出せずに至っていない。これまでは上海文芸出版社がもっとも計画的に取り組んできた。たとえば、最近では中国民間文学研究会上海分会との共編で、『中国民間文学論文選(一九四九—一九七九)』(全三冊、一九八〇年五月刊)のような理論面の書物も出した。また上海でもっともさかんな新故事に重点をおいた雑誌『故事会』は、毎号四十万部も刊行されているという。

十五日夜は、静安賓館で上海市文連と中国民間文学研究会上海分会による招宴があった。中国側の出席者は、解放前から民間文学の分野でも多くの仕事をしている趙景深氏(上海民研会主席)のほか、姜彬(同副主席、上海社会科学院文学研究所)、任嘉禾(上海民研会副秘书长)、鄭煌(上海文芸出版社副編集長)、錢舜娟(同民間文学編集室、上海民研会理事)、王文華(上海民研会理事)、李振家(上海市文連外事組組長)の諸氏であった。

十二月十六日(火)。午前、明代に造られた豫園を参観、白田団長は書家の徐伯清氏と書の交換をした。昼食後、上海空港に向かい、十六日の『文滙報』に前日の報告会などの記事が掲載されたことを知った。日航便で十四時少し前に離陸し、長崎経由で十八時三十分成田に帰着した。

なお、この訪中代表団の報告会は、昭和五十一年二月六日に國學院大學で開催された。

(いいくら しょうへい・都立大学)